

最終講義レジュメ（平成20年3月21日）

文学部：坂田正治

講義題目：「エロースさまざま」

テキスト：『エロースへの招待』坂田正治、2001、九州大学出版会

概要：1) 文学におけるエロースの位置について（同書p7-p11）：

- ・ゼウスの色好み—クライスト『アンフィトリオン』
モリエール；プラウトス

- ・エロースとものあはれ—万葉集、源氏物語、芭蕉
- ・無償の愛—ミンネザング

2) アガペー、エロース：

- ・アガペー：神の愛。神が罪人たる人間に対して自己を犠牲にする
憐みある行為で、キリストの愛として新約聖書に表れた思想。

- ・エロース：普通には恋愛・性愛の意味であるが、プラトンは愛の
種々な段階を説き、最高の純粋な愛はアイデアの世界に
対する憧れであるとした。これは真善美の世界に到達
しようとする哲学的衝動を意味する。⇔アガペー

3) プラトンの『饗宴』について：

- ・構成：五部構成（序・第一部・第二部・第三部・結びの口上）

- ・アリストパネスの文学的エロース論（第一部、上掲書p22以下）：
人間＝男、女、男女

「・・・したがって、完全なものへのこの欲望と追求に、恋（エ
ロース）という名が付けられているのだ」

- ・ディオティマによるエロースの奥義（第二部、同書p34以下）：

4) 芭蕉の恋句について：

- ・俳諧における「恋」の位置（同書p43以下）：

二花三月＝自然の風物の象徴

恋＝人情、風雅の極致

- ・「おかし」から「あはれ」へ（同書p47以下）

床ふけて語ればいとこなる男 荷兮

縁さまたげの恨みのこりし 芭蕉

- ・王朝風の恋模様(同書p50以下)

起もせできゝ知る匂ひおそろしき 東睡

乱れし鬢の汗ぬぐひ居る 芭蕉

- ・下世話な恋句(同書p54以下)

- | | |
|-----------------------|-----|
| 黒木ほすべき谷かげの小屋 | 北鯤 |
| たがよめと身をやまかせむ物おもひ | 芭蕉 |
| ・遊女を詠う芭蕉（同書 p 5 6 以下） | |
| 遊女四五人田舎わたらひ | 曾良 |
| 落書に恋しき君が名も有て | 芭蕉 |
| ・猫の恋 | |
| 猫のいがみの声もうらめし | 景桃丸 |
| 上はかみ下はしもとて物おもひ | 芭蕉 |

5) エロースの殉教者ヘルダーリン：

- ・ディオティーマとの出会い（同書 p 1 8 1 以下）

「わたしは一度それを見たのだ。わたしの魂が求めている唯一のものを。・・・」

「ああ、彼女のいることによって、すべてが浄められ、美しくなっていた・・・」

「この恋の一瞬に比べれば、数千年の間に人間がし、考えたすべてのことも何であろう。それはまた自然においてもっとも成功したもの、もっとも神々しく美しいものである。人生の階段の一段一段はこの一瞬へ通じている。そこからわたしたちは来る、そこへわたしたちは帰ってゆく。」（『ヒュペーリオン』）
- ・実在のモデル（同書 p 1 9 1 以下）

チュービンゲン大学卒業後、1795年の暮、フランクフルトの銀行家ゴンタルト家の家庭教師となる。その家の主婦ズゼツテとの魂の交流が始まる。数々の詩が生まれる。

『ディオティーマ』（全120行）

「ひさしいあいだ枯れしぼんで閉ざされていた
わたしの心は いま美しい世界に挨拶する
その枝々は芽ぐみ つぼみをつける
新しい生命のみなぎりに
そうだ わたしはもういちど生に帰ってきた
さながら大気と光を浴びて
わたしの花たちのきよらかな力が
古い殻を破って躍り出たかのように」（第1節）

「ディオティーマ！ この世ならぬひと！」「たぐいない存在！」
「あい見る前からたがいを知っていた／わたしたちの心のおくそこは」(第3節)

「わたしの心の五月がはじまったとき／春の微風とともにわたしにそよぎかけたのは／ディオティーマの精神のいぶきだった」(第4節)

「みちあふれる神々の生のなかへ／無常のわたしは踏みのぼった」(第12節)

「わたしたちが一にして全であるところ／そこだけがわたしの家だ」(第13節)

・ズゼツテ (=ディオティーマ) の手紙

「世と後世のために生きていらっしゃる」

「あらゆる美しいものの鏡であるあなたの高貴なご天性が、あなたのなかで破壊されてはなりません。あなたには、浄化されて崇高な姿であなたに現れるものを、ふたたび世に送る義務がございます」

↓

『ヒュペーリオン』

「あなたが幸福な一瞬間のうちにまとめてお感じになるような幾世紀の黄金時代、それが失せたとき、よりよい時代のあらゆるすぐれた人たちの精神、英雄たちのすべての力の泉、そういうものを、あなたは、ただひとりの人、一人の人間が埋め合わせをすることをお望みになったのです」

「あなたは、この国の民衆の教育者となるのです」

↓

『パンと葡萄酒』(全160行)

「何びとも生を独りで担うことはなかった／分け合ってこそ この至高のものは喜びとなる」(第4節)

「・・・そして乏しい時代に詩人は何のためにあるかを／けれど詩人は(そうおんみたちは言う) 聖なる夜に／国から国へめぐり歩いた酒神の聖なる司祭たちにひとしいのだ」(第7節)

「その果てに一人のもの静かな精霊が出現して 天上の慰めをそそぎながら／昼の終末を告げて消え去ったとき／いくつかの賜物が残された かつて天上の合唱が高らかにひびき／それがまた蘇るべきことの証として」(第8節)

「かれこそ地上に留まって 遁れ去った神々の痕跡を／みずから暗黒のなかの神なき人間たちのあいだにもたすものであるからだ／（中略）しかし そのあいだにも 松明をかざす者として 最高者の子／あのシリア人が影たちのあいだに降ってくる」（第9節）